



タイトル	喰い尽くされるアフリカ 欧米の資源略奪システムを 中国が乗っ取る日
原 題	The Looting Machine
著 者	トム バージェス Tom Burgis
訳 者	やまだよしあき 山田 美明
出 版 社	集英社
発 売 日	2016年7月31日
ページ数	383頁

石油やダイヤモンドのほか、多くの資源に恵まれているアフリカ大陸。だが、そこに暮らす人々の多くは厳しい貧困と内戦に苦しんできた。膨大な資源が生み出した巨額の金はいったいどこに消えたのか？

長くアフリカに住み丹念に取材を重ねたフィナンシャル・タイムズ紙の記者が直面したのは、欧米が作り上げ、中国がブラッシュアップした巧妙な略奪システムだった。

さっそく目次を見てみよう。と言っても章ごとのタイトルが余りにも抽象的なので概要も併記しておこう。

はじめに

序 章 富の呪い

天然資源に恵まれた国々に暮らす人々の大半は貧困に苦しんでいる。アフリカも例外ではない。エコノミストはこの現象を「資源の呪い」と呼んでいる。フィナンシャル・タイムズ紙特派員としてアフリカに赴任した著者は、「資源の呪い」の実態に加え、資源に依存しているアフリカ諸国で行われている組織的な略奪について取材を始めた。……………。

第1章 フトゥンゴ

アンゴラでは、アンゴラ解放人民運動（MPLA）が支配する共産主義政府と、

欧米が支持するアンゴラ全面独立民族同盟（UNITA）が長年内戦を繰り広げてきたが、2002年にようやく終結した。MPLAの戦費を支えたのは、アンゴラの大地と海底に眠る巨大な油田だった。

MPLAの指導者ドス・サントスは1979年から大統領の地位に居座っており、「フトウンゴ」と呼ばれる大統領の取り巻きと家族は、戦費調達のために作り出した石油利権システムを土台に、特権を私物化し続けている。

筆者は、取材の結果、この「フトウンゴ」を現在支えている、ある中国企業に行き着く。……………。

第2章 貧困の温床

アフリカ最大のエネルギー資源輸出国、ナイジェリア。ニジェール川が網の目のように海に流れ込むニジェール・デルタの地下には大量の原油がある。しかし、石油は乱暴に略奪され、発電所や発電網の整備に資金が回らず、電気代が高騰、ナイジェリア製の繊維製品の価格が高くなり、市場競争力を失った。代わって市場を席卷したのが中国製の模造繊維製品である。有名なブランドのスペルを一部変えたおなじみのものからアフリカ風のプリントまで数多くの製品が密輸されている。そして、中国からのルートには、ナイジェリア人の販売業者、流通業者とのパイプ役の影もちらつき、複雑な構造になっている。……………。

第3章 ^{グワンシー}関係

1990年代から、中国の経済は急速に成長した。中国の国有企業はアフリカに豊富な資源を求めて進出したが、植民地時代から油田や鉱脈を支配してきた欧米企業に取って代わることは容易ではなかった。

そこで重要になったのが、中国独自の価値観に基づいた「^{グワンシー}関係」である。「個人的なつながり」という意味の「関係」を多く持ち、アフリカにおけるビジネスで暗躍し、大物と見なされる一人の中国人実業家の足跡を追う。……………。

第4章 ゾウが喧嘩をすると草地が荒れる

イスラエルの富豪、ベニー・スタインメッツはアフリカのダイヤモンド取引で財を成した後、鉱物資源や不動産事業にも手を伸ばし、資産を増やし、一大企業帝国を築き上げた。同族経営のコングロマリット、ベニー・スタインメッツ・グループ（BSG）の鉱業部門BSGRはギニアに眠る大量の鉱物資源に注目した。だがギニアでは、イギリスとオーストラリアを拠点とする多国籍の資源・鉱業グループ、リオ・ティントが有望なシマンドゥ山脈の採掘権を手に入れていた。……………。

第5章 北京への懸け橋

2010年、任期終了を2か月過ぎても退陣を拒み、独裁政権を築き始めたニジェールのタンジャ大統領を、欧米は非難した。抗議を先導したのはフランスだった。フランスはシャルル・ドゴール大統領の時代から旧植民地に対する影響力を確立し、彼の死後もこのアフリカ支配システムは維持され、資源取引や裏金、汚職のネットワークへと発展していった。

タンジャは、フランスに陰の支配から脱却し、搾取から逃れようとしていたが、そのためには、フランスに代わる援助国が必要だった。そこに顕れたのが中国だった。……。

第6章 融資とシアン化物

2009年、ガーナのアハフォ鉱山。アメリカ最大の金採掘企業ニューモントが採掘を行っていたところ、鉱石から金を分離する際に使われるシアン化ナトリウムが漏れる事故が起こった。もともと、環境被害の恐れや地元住民の雇用が進まないなど問題点が指摘されていた事業だったにも関わらず、このプロジェクトには世界銀行の一部門である国際金融公社(IFC)が出資していた。世界銀行とIFCはガーナ以外にもアフリカの資源プロジェクトに複数出資しているが、投資が地域の役に立っているか、環境コストや社会コストは適当かなど、問題点は多い。……。

第7章 信仰は関係ない

ナイジェリアのニジェール・デルタは世界有数の産油地帯で、政府収入の70%を石油が生み出していた。外貨を独占するためには軍を派遣することもいとわないう独裁政権に対し、地元では当然のように武装勢力が生まれ、原油を盗んで密売したり、政府や外国の石油会社にゲリラ戦を仕掛けたりしてきた。

2010年、ナイジェリア北部ジョス近郊で移民であるイスラム系住民と元々住んでいたキリスト系住民の争いによって200人以上が虐殺された。ジョスはかつて^{すず}錫産業によって栄えたが、産業の衰退に伴い、うまく時代の流れを乗り越えて豊かになっていったイスラム系住民と貧しいままのキリスト教系住民の間に亀裂が生まれ、民族間の争いは、熾烈を極めた。……。

第8章 新たな富裕層

2008年、長くジンバブエ大統領の座に居座り続けたムガベは危機に直面していた。これまでのように圧倒的勝利を収めることが出来ず、第1回投票で対立候補に敗れてしまった。対立候補の支持層を弾圧し、力づくで決選投票を回避して大統領の座にしがみついたムガベだったが、地域の指導者達から、野党と連立政権を樹立することを約束させられる。

支持基盤を固め、治安部隊を強化するために資金が必要となったムガベは同年、

国内のダイヤモンド産地マランゲに軍隊を送り込み鉱山を制圧した。

2013年、マランゲでは労働者が劣悪な環境で働かされていた。この地で操業していたのは、ムガベの秘密警察とつながりがあるといわれている、中国のクイーンズウェイ・グループだった。……。

アフリカにおいて政府が天然資源から得る収入は、汚職の蔓延により権力の中枢にいる人々だけに富を蓄積させている。その結果として、権力者たちの最大の目的は、天然資源に関する既得権益を守ることとなり、激しい権力闘争によって独裁政治を生み出す土壌が形作られていった。そのような背景によって、教育関連の予算が削られる一方で、軍事予算が膨らみ続けている。権力者を批判する者は、治安当局に拘束され、処刑される場合も珍しくない。

アフリカの経済大国であるナイジェリアでも、政府の収入の80%を石油が占めているため、この権益を獲得するために激しい権力争いが行われている。2014年秋までは原油価格が高止まりしていて、ナイジェリアの経済成長率は順調に右肩上がりが続けていくことが出来ていた。それにもかかわらず、ナイジェリアの失業率は高まり続け、若者の失業率は債務危機の後遺症に苦しむギリシャやスペインを凌駕していた。同国では、若者たちの怒りや悲しみ、絶望感などが充満し、職がない若者の有力な就職先が過激派組織となっている。悲しいことに、彼らは日々の生活のために、国家に対するテロの手先となっているのである。貧困がテロを生み出している構図は、アフリカ全体でも中東でも共通しているというわけである。……。

中国はアフリカの経済を発展させるといって、資源開発を次々と進めているが、今のところアフリカの人々にはその恩恵は全く及んでいないという事実がある。エネルギーを輸出するために作られた交通インフラは人々のために役立っていないどころか、むしろ、安価な中国製品が大量に流入するルートとなり、現地の工業化を著しく妨げてしまっている。さらには、そのインフラ建設費のコストの3割程度は汚職によって消えてしまっているという。

アフリカの資源国は植民地時代と何も変わっていない。天然資源の略奪システムは独立後の支配者に引き継がれ、中国や欧米の企業は新しい支配者に協力しながら、略奪の分け前を手に行っている。世界銀行やIMFまでがアフリカの経済発展を支えるために資源関連の融資を実行しているが、現実には多くの職員や関係者がすでに汚職のネットワークに取り込まれてしまっている。アフリカの国々で汚職により蓄えられたお金は海外のタックスヘイブンに逃げていく一方なので、資源開発によってその国の人々の生活が豊かになるというわけではない。

そのうえ、天然資源関連の産業は国内に雇用を生まないため、人々の間に大量の貧困が発生しているという事実を忘れてはならないだろう。たとえば、石油の輸出で有名なアン

ゴラでは、石油が同国の輸出収入の 100%近くを生み出しているにもかかわらず、石油関連産業は同国民の雇用の 1%も生み出していない。インフラの建設では、中国は融資をするだけでなく、労働者も大量に供給しているからである。そのせいで、アンゴラの人口の半数が国際的な貧困ラインである 1.25 ドル未満の生活をしている。

だからこそ、アフリカの天然資源国では 2000 年以降、天然資源価格の高騰により政府の収入が増大していたにもかかわらず、未だに最貧国からなかなか抜け出せないでいる。これらの国々の国民生活が向上するためには、教育水準を高めるのと併行して、製造業の育成に努めていくのが必要不可欠な条件である。アフリカを「資源の呪い」から解放すべき、偉大な指導者が現れることを期待したい。

2014 年 7 月、アメリカの人道支援活動家二人がリベリアでエボラウイルスに感染し、治療のためアメリカに帰国した。その際、共和党の大統領候補の一人ドナルド・トランプがツイッターにこう記した。「エボラの患者をアメリカに入れるな。現地で最高の治療をすべきだ。それだけでなくアメリカにはもう十分すぎるほど問題がある！」と。ニューズウィーク誌も、表紙に猿の写真を載せ、アフリカの野生動物の肉が密輸されると、アメリカにウイルスが広がる恐れがあるという、およそあり得ない内容の記事を掲載している。……。

著者は、ネカのライブを見にロンドンのクラブに行った。ネカとは、今一番勢いのあるナイジェリアの若手ミュージシャンである。ニジェル・デルタ出身のネカは、石油がもたらす住民の苦難を歌う。その歌の中に「VIP」という曲がある。この場合の VIP とは「Vagabond in Power」（権力の座にあるならず者）の略である。その歌詞にはこうある。

おまえは私の心を打ち砕く
私の魂を葬り去る
私の子供を苦しめる
アフリカを苦しめる
権力の座にあるならず者
おまえは私の心を打ち砕く

ネカは「VIP」を歌う前に、シェルなど欧米に拠点を置く多国籍企業が、ナイジェリアを日々腐敗させている事実を聴衆に説明する。そして、説明の最後にこう付け加える。略奪されているアフリカ諸国全てについて言えることだ。「自分には関係ないと思わないで」

2016.10.21